

報 告

日本鉄鋼協会物故会員追悼会営む



本会は大正4年2月6日に創立して以来、去る2月6日に創立70周年を迎え、記念事業のひとつとして同日追悼会を開催した。

参加者は物故歴代会長、同会員、同職員の14遺族17名と石原重利会長はじめ会員、事務局職員を含め約140名であつた。

東京経団連会館901号室会場の壁面には物故歴代会長20名の遺影が、また白菊で飾られた祭壇には物故会員、同職員の写真ならびに故人の業績を示す書籍等が置かれ清楚な雰囲気であつた。

追悼会はまず故人の遺徳を偲び参会者全員による献花

で始まり、次に石原会長から次のような挨拶があつた。

「本会創立時を回顧し、後に会長を歴任された五氏(野呂景義初代会長、今泉嘉一郎第2代会長、香村小録第3代会長、俵国一、第4・8代会長、服部漸第7代会長)が、本会創立の主提案者となり、鉄鋼関係者約50名の賛成を得て設立に至つたこと、創立後の関東大震災による事務所の焼失や第二次世界大戦など幾多の困難にもかかわらず、本会の育成に務められた歴代会長の努力により現在会員数1万名超、65名の職員、9億円の子算規模となり世界有数の学術団体に成長したこと等は、歴代会長の指導力をはじめ役員、会員の理解によるものである。現会長として、この70周年を契機として、本会創立者の意志を後世に伝え、併せて従来にも増して研究開発、技術開発を進め、本会発展の基礎を確立すべき重責を感じている。」

引き続き、東京工業大学工学部飯田賢一教授による講話「日本鉄鋼協会初代会長工学博士野呂景義先生—その業績とその周辺の人びと」を拝聴した。

内容は、①日本鉄鋼技術の父・野呂先生、②野呂景義先生の生いたち、③官営製鉄所建設計画の提唱、④日本鉄鋼技術の自立、⑤学理と実業の合同、⑥関東大震災と野呂景義先生の死に分けられ(詳細は日本鉄鋼協会70年史を参照)、懇切丁寧な講話に参会者一同改めて先人の偉大さに敬服した。

講話の後には、会場を3階の本会事務局会議室に移し和やかな立食会が行われ、時の過ぎるを忘れるほどであつた。

編集後記

「鉄と鋼」などの国内の学会誌に論文を投稿すると審査がきびしく、細部にわたつて直されるので難儀だが、外国の雑誌(国際誌など)への投稿では何も直されないことが多いという話をよく耳にします。本来論文というものは著者の責任で十分推考されて投稿されるべきものですから、内容に手を加えずにそのまま掲載するか、あるいはそのまま返却すべきではないかという気がします。現在掲載不可となつて著者に返却される論文の数は「鉄と鋼」では少なく、投稿数の5%以下のようなので、もつと大幅に返却してもよさそうに思われます。しかし和文会誌分科会の委員になつて5年目にもなりますと、それほど事態は簡単でもないように感じられます。

従来、修正すべき点が多い論文で、修正を要する点を指摘することなく返却した場合、再投稿の原稿がよくなつていた例は少ないようです。不本意にも何十箇

所もの修正を依頼し、著者との間に2~4回にもわたるやりとりを重ねることになりますが、これは双方にとって大変な負担となります。

投稿者の心理として、自分の書いた原稿を共著者や第三者に見せることは不備を指摘されるようで抵抗があるものです。また読まれた方でも少しおかしい点があると気付いても、執筆者との人間関係を重視して、きびしい意見を言わないのではないのでしょうか。どうせ投稿すれば編集委員会が直してくれるわけですから。このような推察をいだける論文がいまだにあることは残念に思われます。投稿できる原稿を直ちに協会に発送せず第三者に読んでもらい、1~2カ月かけて内容を考え直したら、おそらく半分以上の論文は書き直しの必要性を著者自身が感じるのではないのでしょうか。(E.F.)